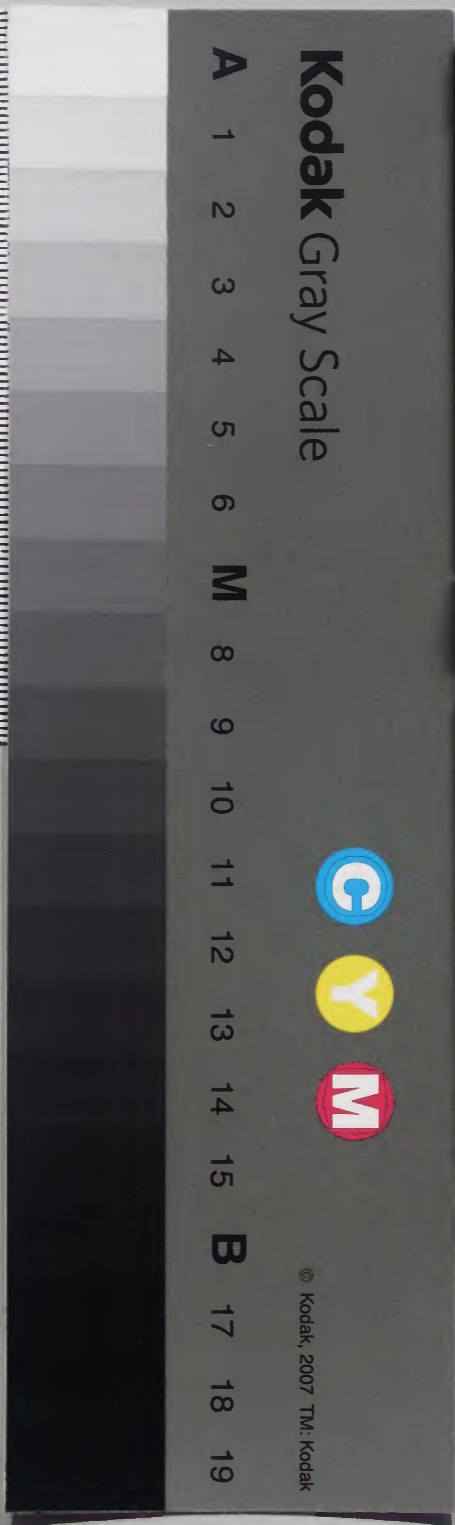


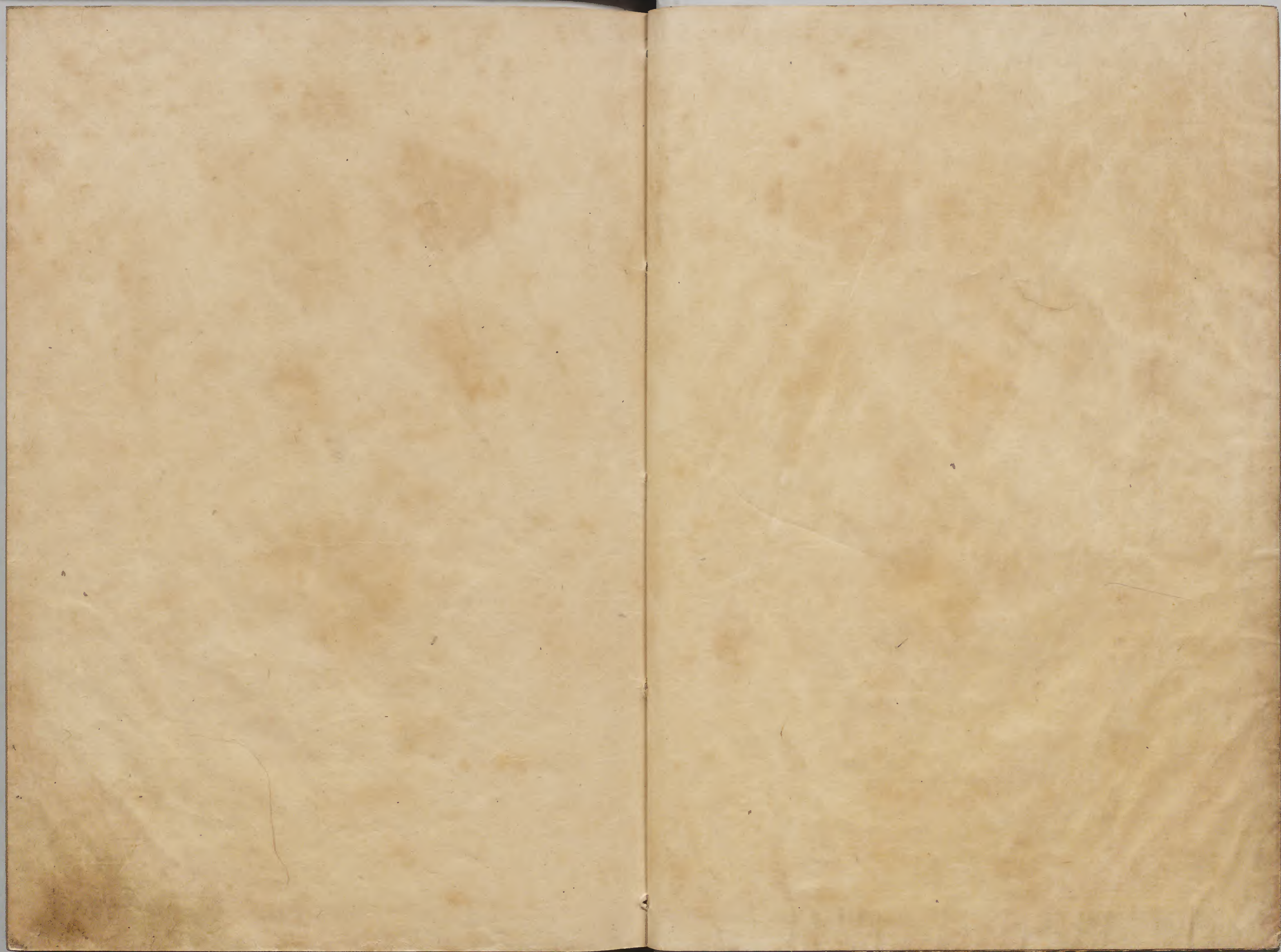
寛永諸家譜

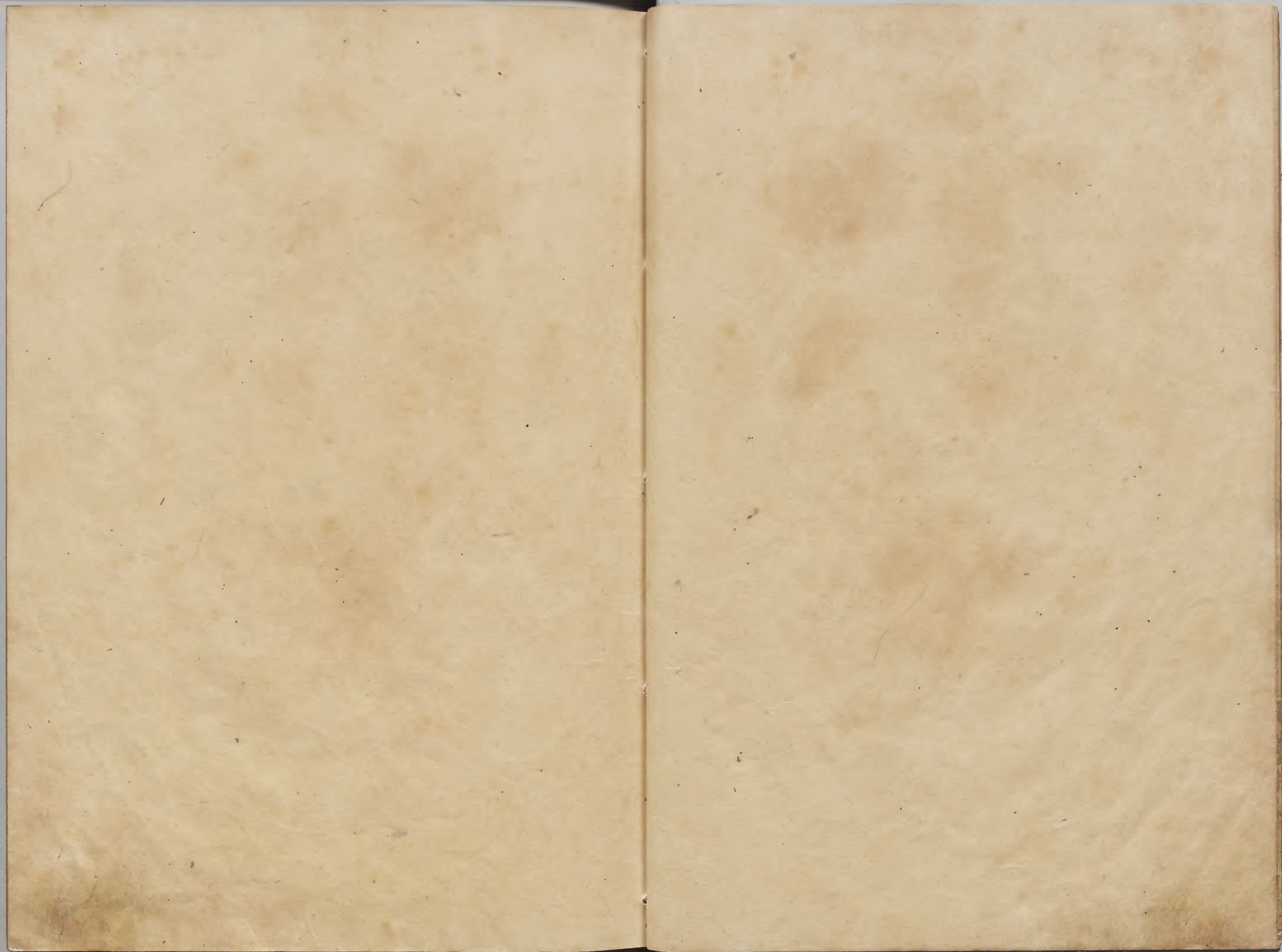
平氏十九冊之内  
清盛流

64

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186	(64)	
函號	76	1	







織田

中川

藤掛

鴻

津田

梶川

寛永諸家系圖傳

平氏

清盛流

織田

人五十五

桓武天皇

平城天皇

寛永諸家系圖傳

三  
嵯峨天皇

三  
淳和天皇

三  
高原親王

一  
式部卿

三  
高棟

正二位大納言

天長元年平姓とす

三  
高見

無位正官

三  
高澄

後五位下  
上総介

始平姓とす

良望

鎮守府將軍とよぶふしうげん 後のちありたりといふ常陸大掾ひろはなのおいら  
國香くにかと号なづと

貞盛

鎮守府將軍とよぶふしうげん 後のちありたりといふ常陸大掾ひろはなのおいら  
國香くにかと号なづと

維衡

後のち五ご位い下げ

上かみ鎮ちん外がい

常陸ひろはな外がい

維將

肥ひ前ぜん守しゅ

小条せうじょう入いり祖そ

正度

越こし前ぜん守しゅ

後のち五ご位い下げ

正衡

右近衛

左近衛

正盛

正位 權波

大進尉

忠盛

正位下

刑部卿

内侍殿

院執柄

仁年三月十九日卒と載

五十八

正盛

正一位太政大臣

養和元年二月七日薨と載

六十四 法名淨海

重盛 モリ

正二位 小松内大臣

左大将

四十二歳 ニ 薨 ニ 法名 淨蓮 ニ

維盛 モリ

三位 左中将 二十七歳 ニ 卒 ニ

妙光 モリ

資盛 モリ

新三位 左中将

越前守

盛徳 モリ

親吉 モリ

河州 津田 於 右 史

越前 守 津田 於 右 史



親基 ちかき

信太郎 のぶたろう

親行 ちかゆき

孫太郎 まごたろう

基行 ちかゆき

孫次郎 まごじろう

行廣 ゆきひろ

太郎兵衛 たろうべゑ

末廣 すえひろ

二郎 太郎兵衛 じろう たろうべゑ

廣定 ひろさだ

早也 はや

基實 ちかみ

三郎 さんじろう

廣村 ひろむら

三郎 二郎 さんじろう じろう

真昌 まこと かつら

三郎右衛門

某 なにか

可久保 かひくべ

孝昌 たかかつら

次郎右衛門

昌之 まさゆき

三郎五郎

孝勝 たかかつら

助次郎

孝右衛門 たかかつら

教廣 のりひろ

次郎右衛門

孝仁 たかかつら

次郎右衛門

勝久かつひさ

二郎 淳正左衛門

久長ひさなが

淳正左衛門

敏仁としひと

次郎九郎

敏定としさだ

二郎

敏行としゆき

大馬助

尾州岩倉の城守なり  
新波玄衛しんな げんゑい

上心郡守かみこころのしゅ  
法名寺ほふなでら也

信安

信濃守

尾州志念の城より

上四郡を獲

新波武衛より

法名光永

敏宗

左馬助

尾州奥田の城より

新波武衛より

定宗

後四位 尾州奥田の城より

母付系極老親より

飯尾氏より 飯尾氏より

室町將軍より 御付の人

くくの家

永祿三年五月今川義元と戦ひ

尾州新津の城より 討死

法名寺堂

信宗

正五位上 茂物

敏尾忍波

お羽子 母 細川依理大史晴元の女

徳川信蓮の子 伯父 信長 長原 屋須

守山 草津号と領

信長と信隆の孫 後秀

了信

天正十八年より延宝下り叙

同十九年二月廿二日卒

歳六十四

敏成

茂物

天正十年六月二日洛陽不徳

了信の事記

女子

女子

女子

長谷川教五郎の書

女子

實名飯尾義之助の重宗の女

重宗の子

飯尾義之助

信忠の子

天正十年判發の一の草の店の中

号のを

元和二年七月の下の病の死の歳の七の十七

女子

女子

右林準人の書

女子

浪波守信宗の子とす

敏隆

永沼左馬進

信定

彈正忠法名月忌

信秀

彈正忠保後守

天文十八年三月丁未卒

蔵四十二  
法名桃巖

信康のぶやす

五次郎

信光のぶみつ

源三郎

信成のぶなり

市之助  
源三郎  
源三郎  
源三郎  
源三郎  
源三郎

信昌のぶまさ

四郎三郎

千見

池田いけだ  
源三郎  
源三郎



信實のぶざら

四郎次郎

信次のぶつぐ

孫十郎右衛門尉

信廣のぶひろ

三郎五郎

大隅守

母信長のぶなが

別べつ暖ぬく

信長のぶなが

小名吉法師おなきちほうし 上かみ總すん介け 從よ一位いちゐ右みぎ大臣だいじん

太政大臣たいていだいじんとをく

天正十年六月二日洛陽中らやうちゆう能のう寺じ

一いちしとひくひく堯ひょうとと也なり一いち十九じゅうきゅう

法名ほふな恭きん嚴げん慈じ覺かく院いんと号ごうと

信行のぶゆき

勘十郎のぶじゅうらう

武流たけりゅう

信澄のぶすみ

七五郎ななごろう

昌沈まさしづ

之水みづののししをを信守のぶまもり

元信もとのぶ

之水みづ守まもり

幼少わらわより織田おだ信隆のぶたかより

後のち秀頼ひでたかより

大坂おさか御陣ごじんのの後のちよりおおううれて

東照とうしょう大行現だいこうげんより

河州かす御守ごまもり甲か賀が二に礼れいといいて

此地このち二に子こ名なとといいて

信高

三右衛門

信也

上野分

二右衛門

和發

老犬と号す

享長十九年七月十日卒

とは名心器

真珠院と号す

信重

民部大輔

直政

右大臣

高貞和尙

信則

刑部大輔 桓位下侍 生小次郎

寛永七年正月二日卒

中一三十二 法心湯巖

惠照院と号す

信勝

上野介 十圓武院

寛永十六年十二月晦日

桓位下侍 叙

女子

信當

孫十郎

長二十年伏見と

大権現と

台院殿と

信治のぶ

九郎 尾州の野矢の城の守りの  
河州の攻めのし討た死す

信時のぶ

五の藏の守り

信興のぶ

長七郎  
河州の攻めのし討た死す

秀孝ひで

長六郎

秀成ひで

長の守りのし討た死す

某

中根と号と

長益

源五郎 竹後

法持と有楽と号と

之和七年十二月十日七十

五歳とて卒と正徳院と号と

長孝

一名の長一 河内守 従五位下

長則

河内守 従五位下

頼長

一名の秀信 左門 従四位下 竹後

室上寺と号と

長好 みづ

三五郎

後長 し

右衛門佐

長次 みづ

長政 みづ

左衛門佐

七回お登

享長十年みづ後五位下みづ叙し

長定 みづ

左近 みづ

尚長 ちやうちやう

大和守 やまとのり

後五位下

寛永十四年十一月ノ辛ト

歳四十二

女子

小川坊城守相室 こがわぼうぢやうさうしやうのしやう

長種 ちやうしゆ

修理亮 しゆりやう

女子

伴尾の水の書 ばんぶいすのがき

大云院 おほいん

女子

松平まつだいら馬ま允のり書 まつだいらまのりがき



長利ながり

又十郎

天正十年六月二日あまのしんねん 京きやう於お二条にじやう

としいて討う死し

女子

濱井はまのい俊しゆん前まへ長なが政せい書がき

女子

神保かみまも五ご藏ざう与よ氏うぢ信のぶ書がき

女子

大山おほやま鉄てつ女むすめ書がき

女子

飯尾いひお隠かく波なみ也や信のぶ宗むね書がき

信忠

正之位右々衛中尉 秋田外 童名  
奇妙御曹司

天正十年六月下京都二条  
よりいへる年を歳二十六 法名信嚴  
大之院と号す

秀信

正之位波年中納言

秀則

河内位下竹原 右兵衛尉 法名宗余

信雄

内大臣正二位 童名宗寛御曹司  
之反一名、信意 或名具豊  
天正十八年入道 号す具と号す

寛永七年四月廿九日薨む七十之歳  
は名實叡 述源院と号す

信孝

三七郎

天正十一年尾州羽田内海  
辛未年 二十六

秀勝

正之位中納言 童名 河次 出葛岡  
秀吉 子とて 河州 女とて  
誠白とて

勝長

源三郎 童名 御坊  
武田信玄 子とて

勝良 トウリョウ

源三郎

信秀 ノブヒデ

後五位下 信俊 ノブヒト

重名 大洞三春 オホアタリ

重法 ノブホウ

信高 ノブタカ

後五位下 重法 重名 小洞 コアタリ

大権現了了所 信高 ノブタカ

重 ノブ

後五位下 重名 ノブナ

將軍家了了所 信高 ノブタカ

家乃 重 ノブ

信右 ねぶ

後五位下 式部  
法名道下

了南 ねう

信貞 ねぶ

淡み佐下 新樂助  
後こた京亮きやうりやうと号なづも  
童名わらわ山人おひと

寛永元年六月六日死に歳五十一

貞丞 まこと

左京亮 付國近くにに

女子

生官務くわんむが書

信好のぶよし

從五位下左京亮

童名長好なながよし

長次ながつぐ

童名縁なまのゆかり

長岑尉

女子

信濟之郎のぶゆき信康のぶやす之の家け

母はは信忠のぶただ信雄のぶおととみみ

女子

南みなみ生う飛と原はら守まも氏うぢ之の書がき

女子

筒井つづみ伊い賀が守まも定さだ次つぐ之の書がき

女子

藤ふじ田た肥ひ前まへ守まも利り長なが之の書がき

女子

丹羽五高乃長子

女子

二系間白根實の室

秀雄

後之任冬議

童名三浦

某

母名伊丹の佃具教卿女  
越前大野の城守

安永十五年八月八日卒  
二十八 天叡玄高月松院と号す

加余 母名秀雄と云れ 早世

高碓たかす

市告場

但馬守たにまのり

信良のぶよし

後四位上

右近衛権大夫えきさねのたけのみこと

兵部卿へいぶのうぢ

兼名勝法師ななかつのほうし

生國守なまくにのり

寛永三年五月十七日

歳四十二 法名 松尾 心善院しんぜんいん

女子

女子

福系能登与信通ふくけいのかのり 信通のぶとほ 書

女子

信昌のぶまさ

後五位下

同懐いどうのなつ 与

兼名ななな 百少



生國上野

寛永十六年十二月辰五位下

叙

某

猿子代

元和九年十月十八日一死

威心 法名天心幻生

信友

本雲守 辰巳位下侍

信尚

侍

友貞

教島助

女子

松原伯耆守重長のぶながの書

女子

信為のぶあき

伊豫守いよのり

良雄りょうお

正五ただしご佐上さかみ傳つた足あし之の膳ぜん正ただし

長能ながのぶ

五郎八

女子

秀吉ひでよし書かくく子ことと母ははは秀雄ひでおとと同おな

女子

玉方丹後守雄氏の書

女子

家乃紋

將軍義昭より桐又二川兩とたまふ

武衛より瓜の紋とたまふ

織田の家此紋と羽の蝶

織田

● 常高 つとむ

生國尾張 なつくわ

順後 のち

生七郎

生國尾張

順久のぶひさ

令后出射

射馬也

生四日亦

織田信長

と申す

と云ふ

主後守田

修治亮

家

老とれ

勝家

没落の

後浪人

と海に

舟着ち

り

と云ふ

と云ふ

病死

や

六十七

順高のぶたか

令后出射

生四日亦

と云ふ

と云ふ

寛永十六年

十二月

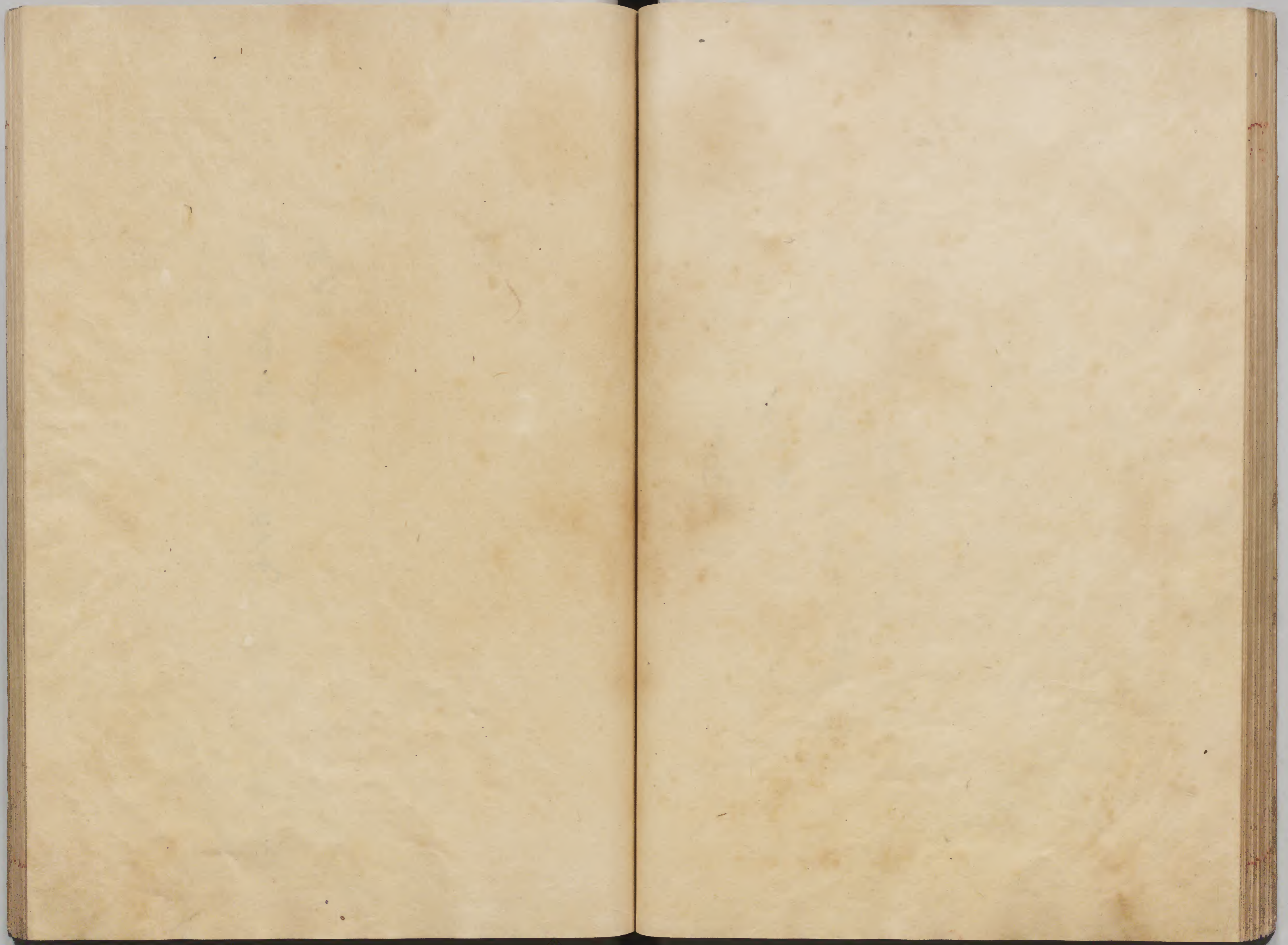
かたれて

將軍家

ついで

と云ふ

家次いえつぐ 敏とみ 氏うぢ



● 信定のぶさだ

鴻こう

織田おだ 孫まご 正ただ 長なが 馬うま

尾川おがわ 春日かすか 初はつ 郡ぐん 守まも 傳つた の 城しろ 守まも り 家いえ

古ふる 名な 月つき 巖いわ

信正のぶまさ

織田掃部おだのぶらふ

法祈ほつね一いっ玄貞げんていと号なづも字あざな傳つたの

博ひろ之のと号なづも

一正いっせい

孫左衛門

生玉尾張なまたまおき

くくめめくく鴻こうと号なづも

享長八年きやうちやうはちねんののおおままりり

大権現おほいけんげんと号なづももくくままりりはは名な鉄てつ使し

正重せいしゆう

友左衛門ともざゑもん 十じゅう回かい月げつかか母はは、築田やきでおお好このちちがが女むすめ

判發はんぱつ一いってておお南なんと号なづも

二安にやす

口郎左衛門くちらざゑもん 十じゅう玉たま周しゅうおお



孝長十七年

大権規と押

石と

大坂

名酒院

將軍

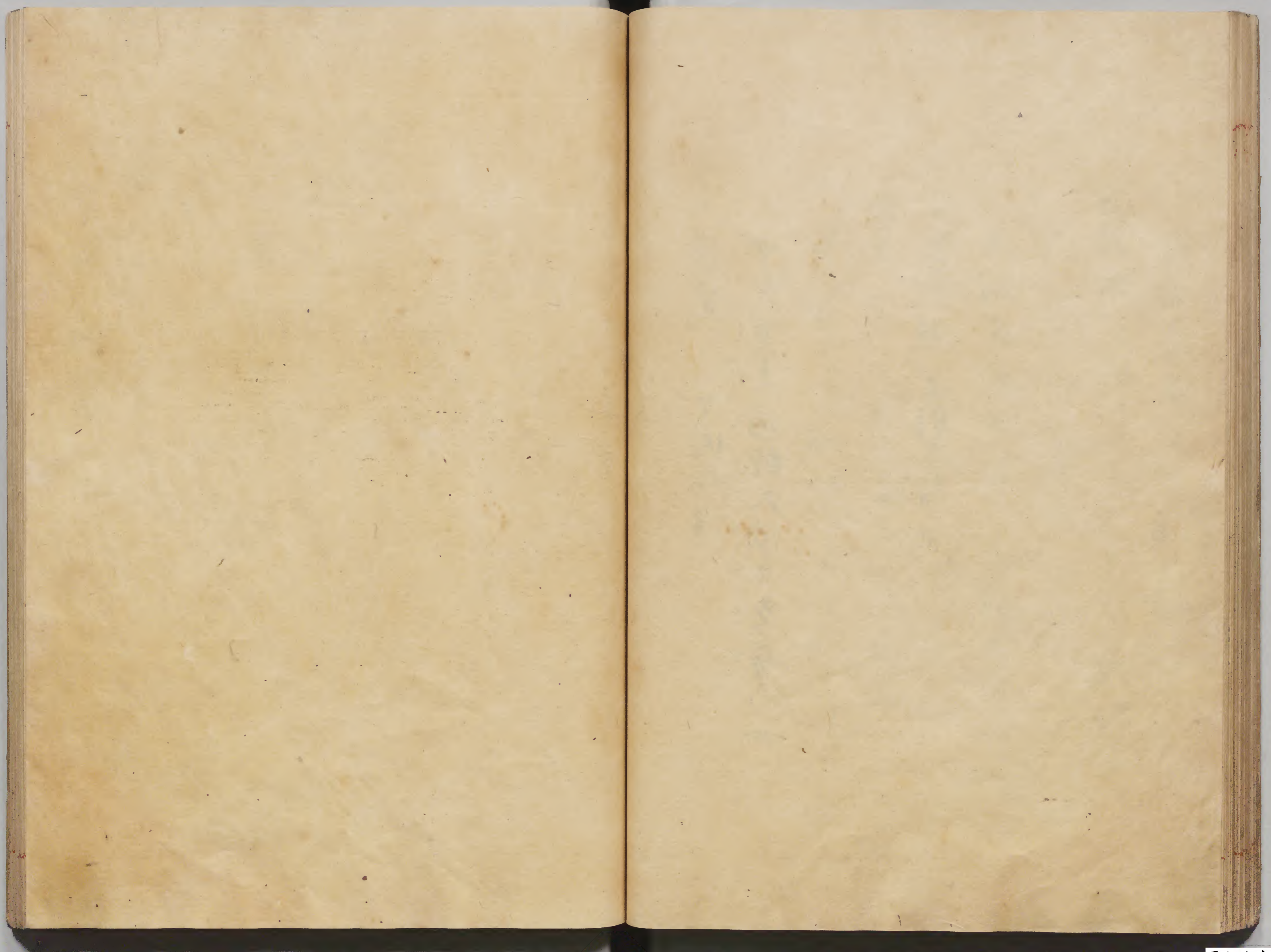
寛永十年

正利

赤尾

母吉 万里小浜

家乃 紋 上解の 藤 凡



集

織田駿河守

集

織田利部少輔

中川

織田氏

信長にぶな一信之にしぶ姉を

法名道見はうみちみ

某

八島集

てらめくあつた中門ちゆうもんと称なづ

信長一子

忠勝ちゅうしょう

八島集

八お尾張りやう山やま

信旗のぶしほとよよ秀名ひでな一子

孝長五年たかながごねん

又松現またまつげんとよよ

台たい酒しゆ渡わた殿のり一い信しん之の多た子し中ちゆう門もん

寛永かんえい又また年ねん辰しん五ご位い下した一い叙しよと

光重みつしげ

八島集

八お尾張りやう山やま伏見ふし見

元和之<sup>り</sup>子<sup>り</sup>

名<sup>り</sup>流<sup>り</sup>敏<sup>り</sup>一<sup>り</sup>所<sup>り</sup>る<sup>り</sup>一<sup>り</sup>ま<sup>り</sup>

寛永十八年一<sup>り</sup>死<sup>り</sup>

重<sup>り</sup>勝<sup>り</sup>

長<sup>り</sup>之<sup>り</sup>郎<sup>り</sup>

生<sup>り</sup>回<sup>り</sup>

武<sup>り</sup>藏<sup>り</sup>一<sup>り</sup>名<sup>り</sup>

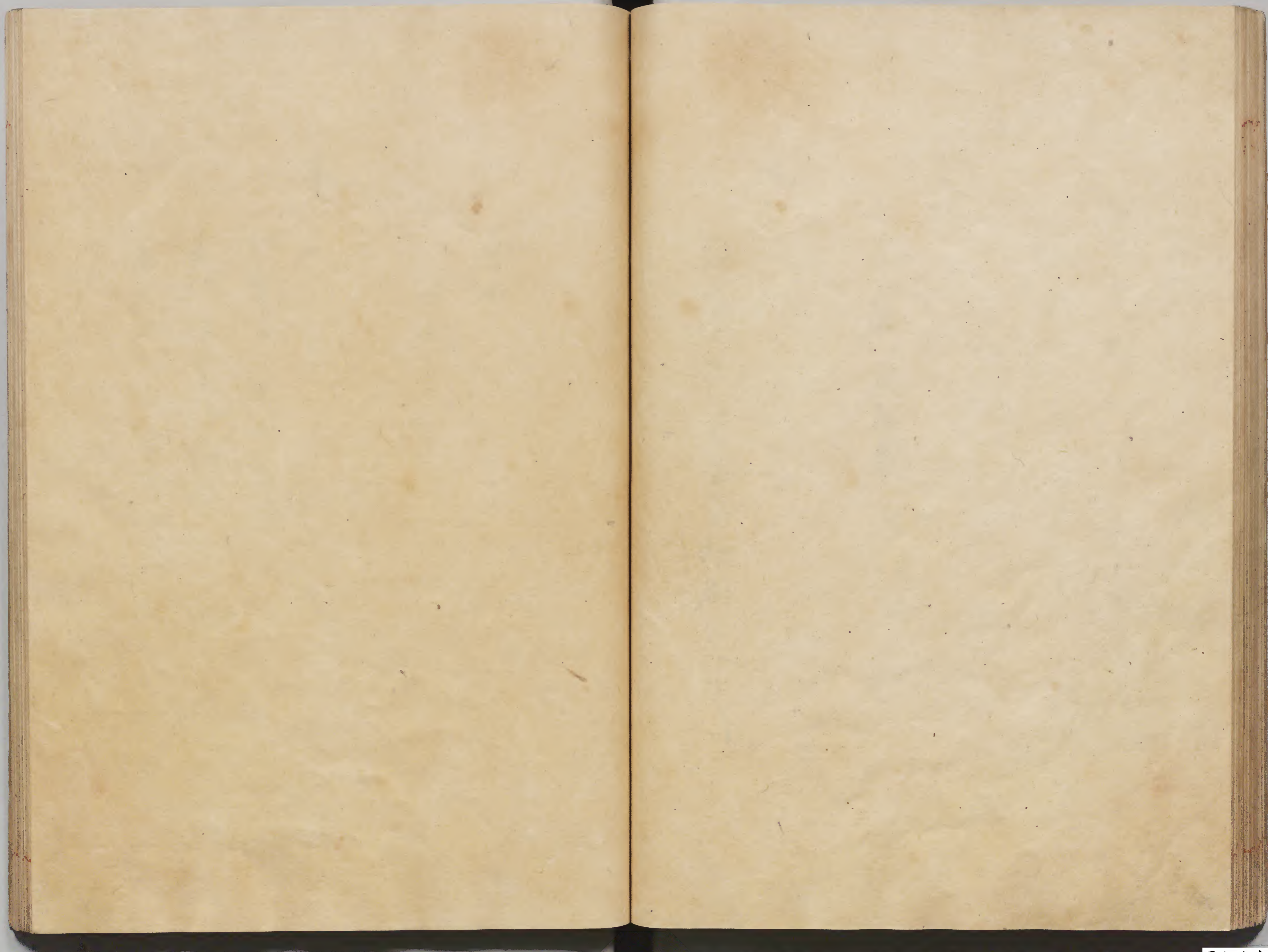
勝<sup>り</sup>宗<sup>り</sup>

信<sup>り</sup>之<sup>り</sup>郎<sup>り</sup>

廿<sup>り</sup>回<sup>り</sup>日<sup>り</sup>舟<sup>り</sup>

寛永七年一<sup>り</sup>小<sup>り</sup>普<sup>り</sup>請<sup>り</sup>役<sup>り</sup>と<sup>り</sup>つ<sup>り</sup>心<sup>り</sup>

家<sup>り</sup>乃<sup>り</sup>紋<sup>り</sup> 媽<sup>り</sup>酸<sup>り</sup>年<sup>り</sup>



● 集

津田つだ

織田おだ 一いっ 本ぽん 家か

伊賀いげ 守しゅ 七しち 回かい 尾張おき

尾州おしゅう 海東かいとう 郡ぐん 松葉しょうえつ 庄しょう の 城じょう 守しゅ 丸まる

家け 守しゅ としし 織田おだ 源げん 正忠しょうちゅう 佐貞ささだ 守しゅ 家け

某

仙傳者 生國日記

父伊賀守が命よりしり 出家とるる

後還俗して 武志修めりしり 上方

しり 中しり 之好實体よりしり

清書

仙者 長太郎 生國日記

清書より織田氏と改く 津田と号し

名系とるる 是れとるる

織田信長よりしり 然とて 念じ

十八歳より 浪人と たり 参り

是れより 赴き 阿部 伴孫と たり

大に 況し 所より たり 十

より 逆し 舊より たり

く 實とるる 是れとるる

大に 現し 旧より たり 感し



をすむ録しつ四為しつしむ  
是しつしつ又信長しつしつ  
開ヶ尔御陣一五年が伏見  
しつしつ林原式部大輔しつしつ

大於現しつ福しつしつ是しつ先  
是つしつしつしつ人しつしつしつ  
又顔形しつしつしつ  
之後里船泉州博海しつしつ時  
大於現御遊湯のしつしつ所は御あり

河石田重頼一成陽の政所祓也  
しつしつ清岳しつしつて身寄しつしつしつ  
大於現一成しつ宣汝清岳しつしつしつ  
友とあは是融人と見知しつしつしつ  
一成と言しつ授しつ清岳の地はしつしつ  
開ヶ尔御陣の時石田信部が輔之成  
兄一成しつしつしつしつ和山の地  
しつしつしつしつしつしつ清岳父子  
しつしつ一成しつしつしつしつしつ

元長五年九月十五日

大権現佐和山表<sub>と</sub>。御出陣<sub>あつり</sub>ありと  
筑前中納言<sub>つくのなごんごん</sub>秀秋<sub>ひであき</sub>及回中<sub>かへちゆう</sub>長祢<sub>ながね</sub>痛<sub>いた</sub>  
小門<sub>こかど</sub>古佐与<sub>ふるさよ</sub>父子<sub>ちちこ</sub>昭政<sub>あきまさ</sub>中務<sub>なかつむら</sub>安治<sub>やすぢ</sub>月<sub>つき</sub>  
子<sub>こ</sub>安允<sub>やすのり</sub>等<sub>ら</sub>氏<sub>うぢ</sub>流<sub>りゅう</sub>流<sub>りゅう</sub>。佐和山の城<sub>さわのやまのしろ</sub>  
とせ<sub>と</sub>筑<sub>つく</sub>さ<sub>さ</sub>。し<sub>し</sub>誓<sub>ちか</sub>る<sub>る</sub>秋<sub>あき</sub>の<sub>の</sub>秀秋<sub>ひであき</sub>  
佐和山の切通<sub>さわのやまのきりぬぎ</sub>。し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>士<sub>し</sub>卒<sub>す</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>  
ひく<sub>ひく</sub>城<sub>しろ</sub>下<sub>した</sub>り<sub>り</sub>。家<sub>いへ</sub>これ<sub>これ</sub>と<sub>と</sub>せ<sub>せ</sub>し<sub>し</sub>城<sub>しろ</sub>中<sub>ちゆう</sub>  
り<sub>り</sub>信<sub>のぶ</sub>吉<sub>よし</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>び<sub>び</sub>子<sub>こ</sub>重<sub>しげ</sub>氏<sub>うぢ</sub>是<sub>こゝ</sub>門<sub>かど</sub>の<sub>の</sub>外<sub>ほか</sub>

へ<sub>へ</sub>本<sub>ほん</sub>秀<sub>しゆ</sub>林<sub>りん</sub>が<sub>が</sub>先<sub>まへ</sub>の<sub>の</sub>兵<sub>へい</sub>と<sub>と</sub>相<sub>あひ</sub>残<sub>ま</sub>こ<sub>こ</sub>わ<sub>わ</sub>二<sub>に</sub>  
三<sub>さん</sub>交<sub>かう</sub>款<sub>くわん</sub>の<sub>の</sub>兵<sub>へい</sub>併<sub>ひ</sub>り<sub>り</sub>。の<sub>の</sub>城<sub>しろ</sub>かく<sub>かく</sub>信<sub>のぶ</sub>吉<sub>よし</sub>  
と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>び<sub>び</sub>重<sub>しげ</sub>氏<sub>うぢ</sub>士<sub>し</sub>卒<sub>す</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>市<sub>いち</sub>部<sub>ぶ</sub>し<sub>し</sub>小<sub>こ</sub>  
と<sub>と</sub>き<sub>き</sub>我<sub>われ</sub>お<sub>お</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。教<sub>しやく</sub>兵<sub>へい</sub>楯<sub>たて</sub>と<sub>と</sub>か  
へ<sub>へ</sub>挑<sub>いば</sub>戦<sub>せん</sub>お<sub>お</sub>信<sub>のぶ</sub>吉<sub>よし</sub>謀<sub>まう</sub>術<sub>じゆつ</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。  
士<sub>し</sub>卒<sub>す</sub>市<sub>いち</sub>部<sub>ぶ</sub>は<sub>は</sub>城<sub>しろ</sub>の<sub>の</sub>門<sub>かど</sub>外<sub>ほか</sub>へ<sub>へ</sub>か<sub>か</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。  
信<sub>のぶ</sub>吉<sub>よし</sub>は<sub>は</sub>石<sub>いし</sub>火<sub>ひ</sub>矢<sub>や</sub>と<sub>と</sub>殺<sub>ころ</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。  
あ<sub>あ</sub>く<sub>く</sub>信<sub>のぶ</sub>吉<sub>よし</sub>士<sub>し</sub>卒<sub>す</sub>と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。と<sub>と</sub>し<sub>し</sub>り<sub>り</sub>。

揚一めく城門のさきびくと同じ  
実かこうしとひく教とくを敗  
小と清遠教の先業を色一本の場  
とけくうひ矢さりと強そ和を  
うれき宛はしとちる言よとしひ  
大於現より舟鐵おちた事つ及回中其教場  
ととせ宛は水のみくさ  
りく津田仙若とよ清遠是とす  
く一成しはぐ一成清遠しおて

教のし事ときくを一やなり清遠  
がしと強一のぐみく我城とおけ  
城守をかさくひのんとりや  
一和鈴一人と副しとくか  
り一成是と推おしとけ一人  
おほ城守とかとは是しとひく  
舟鐵五郎た事つしあよ舟鐵  
大於現の旨と述くいとく成既  
敷小と汝等達し清遠と一汝

是とうごころんつを伏軍中

捕ふ所の三成が臣鉄炮以奇本帝

と道ふ三成敷小此中より

至り善本よりあるとわら

大行現より御書とより

又

大行現の御とのべい

さき女幕下より

と馬道と

貴とたまふをこわ

しと并然し

はくとも又及運と

うりか

しと并然し

大行現の御と一成り

しと心

謀とよ

二つれ

大権現りしらくとと遇と成の  
書子しといふに此書子の命とと  
とけし進し陣中ととおく成下と  
といて格使とといふ自教とと  
といふとといふは城郭ととかく  
といふとといふは後進自教と  
といふとといふは中ととおると  
といふとといふは一成初とと  
といふとといふはと

大権現し使としけくりくり  
城とといふは一成初とと  
といふとといふはと

同十七日城中しうじく者ありて  
和丸し救とといふは一成初とと  
秀秋し小川と佐とといふは一成初とと  
子とといふは一成初とと  
ハとといふは一成初とと  
まとといふは一成初とと

て書子と教し自教せん其のつら  
清基とよむ子守氏と教ふとぬ  
きくありとありと命しといく  
自教の後教し一殺火しれとお  
あしとく城門といふも実あり  
とたり院しして脇攻む法、撰奪  
行村頼太を先しすみ清基と  
お教し清基院とわし皆太を先と  
し押入貨と一同僚十一人と教

傳とすくふ時一林勘十郎保庇と  
し守主氏是とぬしけてさか  
院しして清基

大権現し福しちり其事と上回

し運と

大権現の作は女昔日暮り下り屋より  
昨今の挙動かくしやあるべしとて  
何清基守氏と御前しりぬさか  
清基がいちく同僚十一人いづきの

法りしゆふふれんやとらふ  
大権現此御り十一人の老女めが知らず  
たひ別りて命をとさすけは是をと率ひ  
く大坂へおちしきをのく宿に仕  
きししとたひ是をとらひて  
信を出し其の約を命を此をとらひしと佐と和と山  
の軍を切りとらひしとらひしと連り  
宿に仕しとらひしと信を出し後に府をとらひして  
大権現の約を命をとらひしとらひしと義を出しとらひして

しゆふ

大権現尾に別り信を出しとらひしと  
一つつ年を終りて計を親を命をとらひして  
信を出しとらひしと尾に別りの者をとらひして二に人を  
とらひしと一つ軍を事をとらひしと一つ方を此を事を  
とらひして是をとらひしとらひしとらひしとやるれ  
とらひしと後に九十に歳をとらひしと死をとらひしと

重氏

八郎左衛門 十四日

孝長五年九月又清基と石田一成は  
あつて依和山の城は所こもあつた  
田中告部は士卒殿に此下り出  
戸と記してさへ世に入主氏及  
下臣は太筆つ一成り太筆某と  
人重氏を執と持二人を刀と

く教の無ともせく是よりりて田中  
氏は士卒去戸の如く退く重氏  
と戸と記して同くさへあつた  
一成は太筆つ一成りて矢又と  
けみ教の中は所つとを初  
いしてすな

大於現の命とよりてまことに城と  
あつたといぬ田中氏の無恐より  
て先入恐れ軍はしつあつた



真名として書け主氏は是と  
みく教無乃諭一可く人事と  
おりいへ概名とり月を是と半改  
ひけこき教乃無ともあひて甚ら  
一教無乃血ともいへ録書と  
字とひる  
主氏文と同やあされ大御書とつむ  
寛永七年 納命とくしり大  
此書の他取とひる

同十年領地とくしる  
同十八年上方とくしる九列乃廻  
乃事を行とむ

重次

平兵衛尉 上木月か

寛永十八年

將軍家と御し

月十九年 納命とくしる

御書院書を所と心

重正しげまさ

長右衛門 十圓目

寛永十九しちゅうじゅう

將軍家しんぐんけに之を奉るをほうる

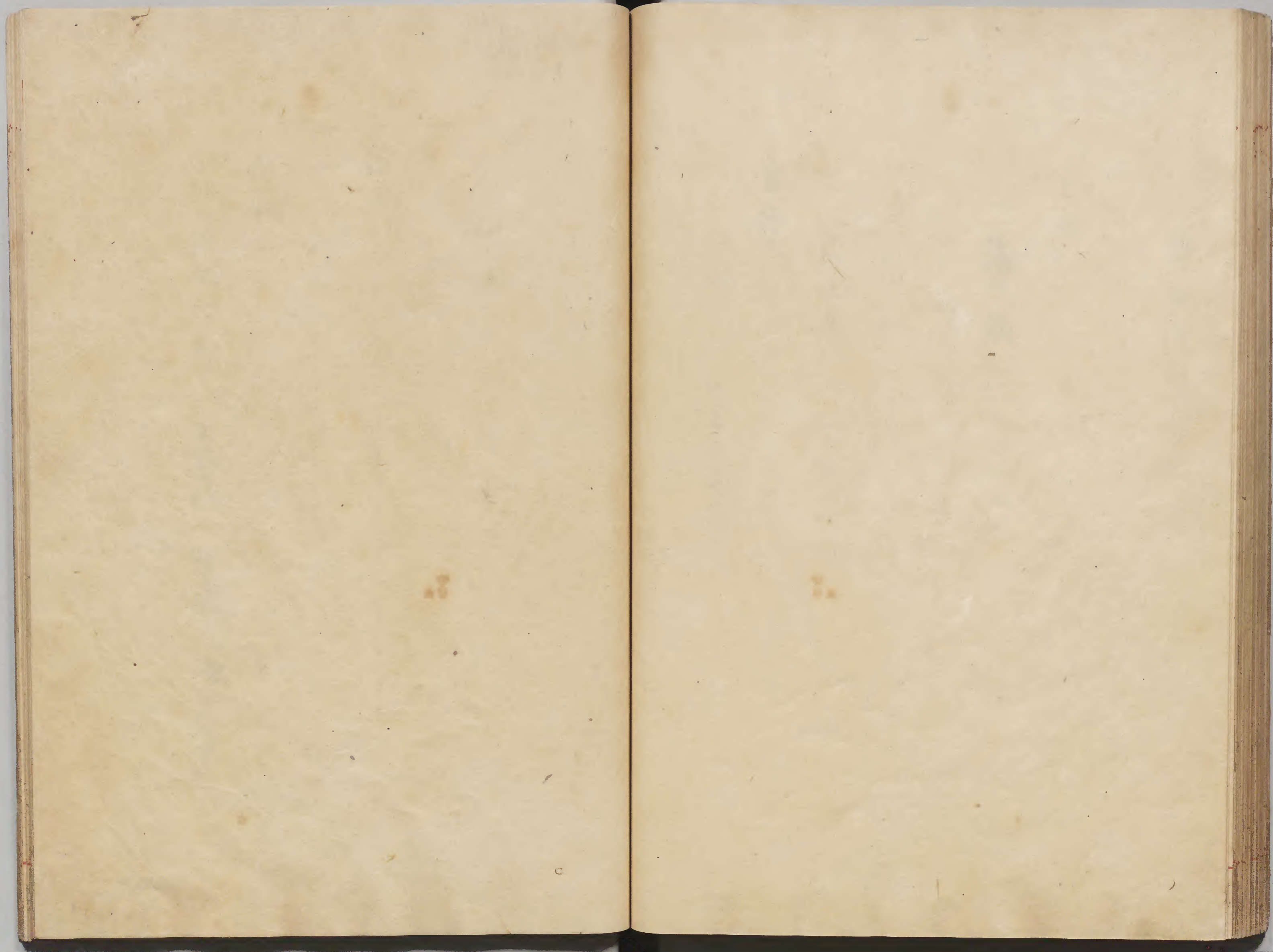
重永しげなが

八助 長右衛門

重名しげな

長之助 十圓目

家の紋いへのかげ



秀敏 ひそ

織田七郎

玄蕃 げんぱん

生島 なましま

敏定 とし

津田 つた

秀守 ひでしゅ

織田七郎 後付田七左衛門とあり  
生國日記

正秀 ただひで

小平次 生國日記  
秀吉ひでよし了しま秀吉ひでよし薨去こうきょ此後  
大於現おほいといひ

名証院殿なしょういん一いししくくししくく

慶長五年けicho用尔もち御陣ごじん付つ付け

元和元年げんわ大坂おさか御陣ごじん志し々々といひ

~~~~~

寛永十二年かんえい正月二十九日しんげつにじゅうきゅうにちにに死しを

歳九十さい 姓名せいせい無な卷まき

正守 ただしゅ

平左衛門

生國山城なまくにやま御殿ごてん

言<sup>い</sup>古<sup>こ</sup>河<sup>か</sup>水<sup>すい</sup>山<sup>さん</sup>之<sup>の</sup>邸<sup>てい</sup>正<sup>せい</sup>晴<sup>はら</sup>子<sup>こ</sup>子<sup>こ</sup>正<sup>せい</sup>秀<sup>しゅう</sup>

書<sup>か</sup>々<sup>々</sup>子<sup>こ</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>

正<sup>せい</sup>幸<sup>こう</sup>十<sup>じゅう</sup>三<sup>さん</sup>之<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>府<sup>ふ</sup>よ<sup>よ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>て

又<sup>また</sup>於<sup>お</sup>現<sup>げん</sup>一<sup>いっ</sup>福<sup>ふく</sup>一<sup>いっ</sup>者<sup>しや</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>後<sup>ご</sup>

名<sup>な</sup>酒<sup>しゅう</sup>院<sup>えん</sup>殿<sup>てん</sup>一<sup>いっ</sup>行<sup>ぎやう</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>々<sup>々</sup>

家<sup>か</sup>の<sup>の</sup>級<sup>きゅう</sup>風<sup>ふう</sup>

● 永<sup>ひ</sup>繼<sup>つ</sup>

織<sup>オリ</sup>田<sup>タ</sup>太<sup>タ</sup>馬<sup>マ</sup>允<sup>允</sup>

牛<sup>ウシ</sup>四<sup>シ</sup>尾<sup>ビ</sup>張<sup>張</sup>

禱<sup>イハヒ</sup>掛<sup>ケ</sup>

織<sup>オリ</sup>田<sup>タ</sup>の末<sup>マツ</sup>流<sup>リウ</sup>りり永<sup>ひ</sup>勝<sup>かつ</sup>二<sup>ニ</sup>歳<sup>サイ</sup>一<sup>一</sup>  
又<sup>マタ</sup>永<sup>ひ</sup>繼<sup>つ</sup>一<sup>一</sup>とくは外<sup>ソト</sup>祀<sup>イハヒ</sup>又<sup>マタ</sup>若<sup>ニハ</sup>掛<sup>ケ</sup>氏<sup>ウヂ</sup>  
書<sup>シ</sup>子<sup>コ</sup>とが家<sup>イヘ</sup>取<sup>トル</sup>一<sup>一</sup>若<sup>ニハ</sup>掛<sup>ケ</sup>の祿<sup>ロク</sup>号<sup>ガウ</sup>  
とちら也

永勝ながかつ

英伯えいぱく 延五のぶ 伍下ごげ 生四なむ 回前わいぜん

秀いさ 名な 一いつ 子こ 小せう 女にょ

又また 於お 現げん とと 小せう 女にょ

名な 延のぶ 院いん 敏みん 一いつ 所しよ 留りゆう 去そ 一いつ 年ねん

元和三年六月五日 六十一歳ろくにじゅういちさい

卒しゆつ 法名ほふな 宗むね 三さん

永守ながしゅ

之これ 就しゆ 生四なむ 回前わいぜん

大おほ 於お 現げん とと 小せう 女にょ

名な 延のぶ 院いん 敏みん 一いつ 所しよ 留りゆう 去そ 一いつ 年ねん

大おほ 坂さか 女にょ 湯ゆ 津つ とと 一いつ 心しん 後ご

将軍家しょうぐんけ 小せう 女にょ 一いつ 子こ 小せう 女にょ

三十七歳さんじゅうしちさい 少せう 病びやう 死し 法名ほふな 英十えいじゅう



永成なが

六郎左衛門

七回抄録

寛永四年

將軍家一湯見一きくまの

日五い月ご十日じゅう御書ごと所ところ心こころ

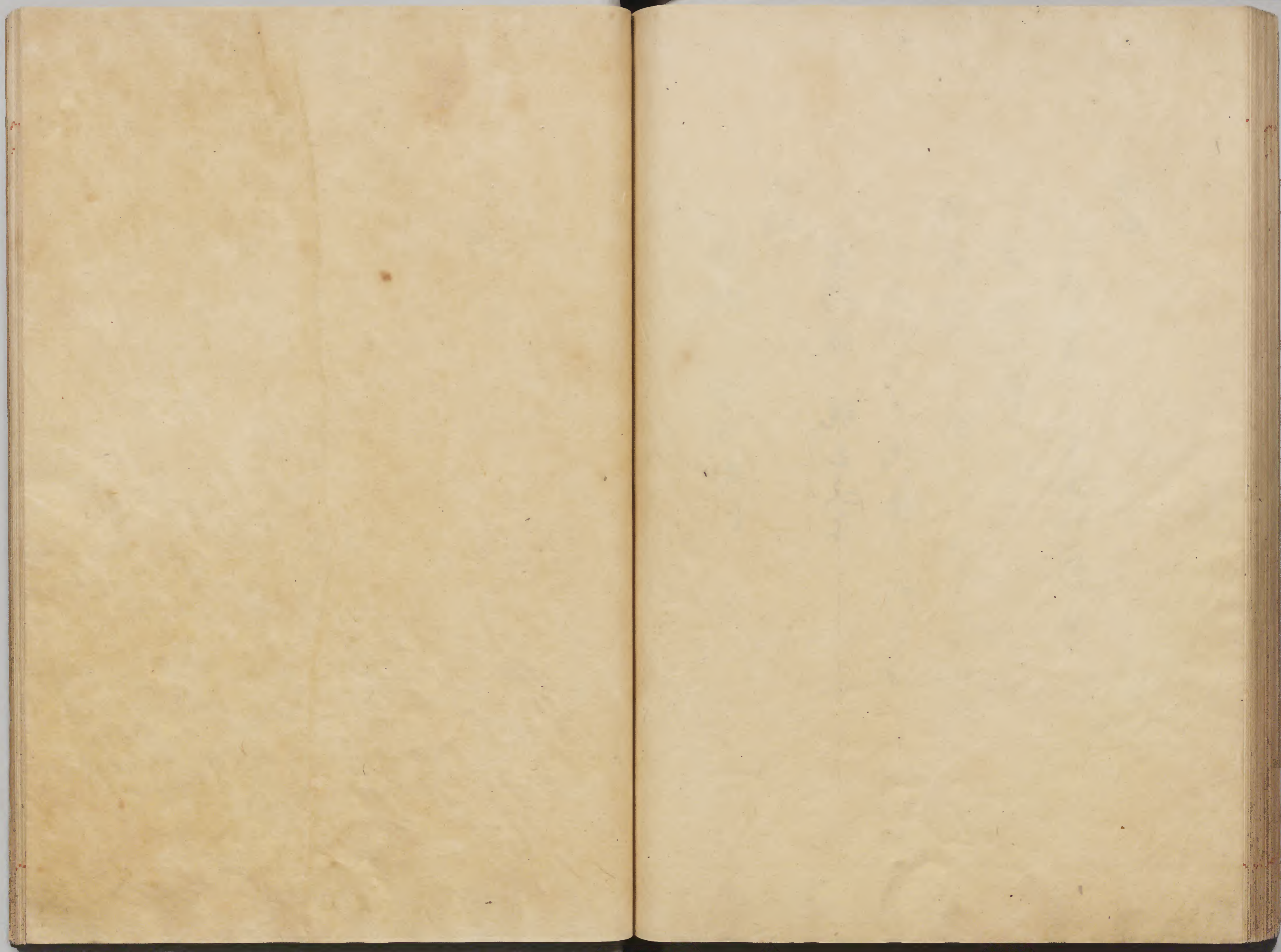
永後なが

監物けんぶつ

七しち五ご後ご河が

家いへのの紋もん

梶かじ之の文字もじ



果 ミカ

瓶 ビン  
川 カハ

魚 イサ 集 ミ 生 ナ 國 クニ 之 ノ 河 カハ 小 コ 河 カハ  
武 タケ 回 ヘ 信 シ 玄 ケン 所 トコロ 之 ノ 魚 イサ 冑 ウラ 士 シ 之 ノ 大 オホ 又 マタ 全 ケン 載 ザイ  
乃 ナリ 之 ノ 河 カハ 紀 キ

忠助

四郎次郎 七回後河

文禄元年 三月 廿九日

東照大権現 へり 今よる

まゝく けん ちん ちん ちん

肥前 於 屋 開 け ぬ 大 坂 陣 へ 往 け

忠久

七回 七回武苑

久和 四回

名 酒 院 殿 へ け ぬ 今 ち ち ち

正次

喜 且 吉 守 七 小 月 藤

乃 軍 家 へ け ぬ 今 ち ち ち

寛 永 十 五 年 四 月 廿 七 日

病 死

正守

七郎忠永 七回後河

寛永三年三月十五日

將軍家より湯へ

忠正

太兵衛

寛永十六年六月廿日

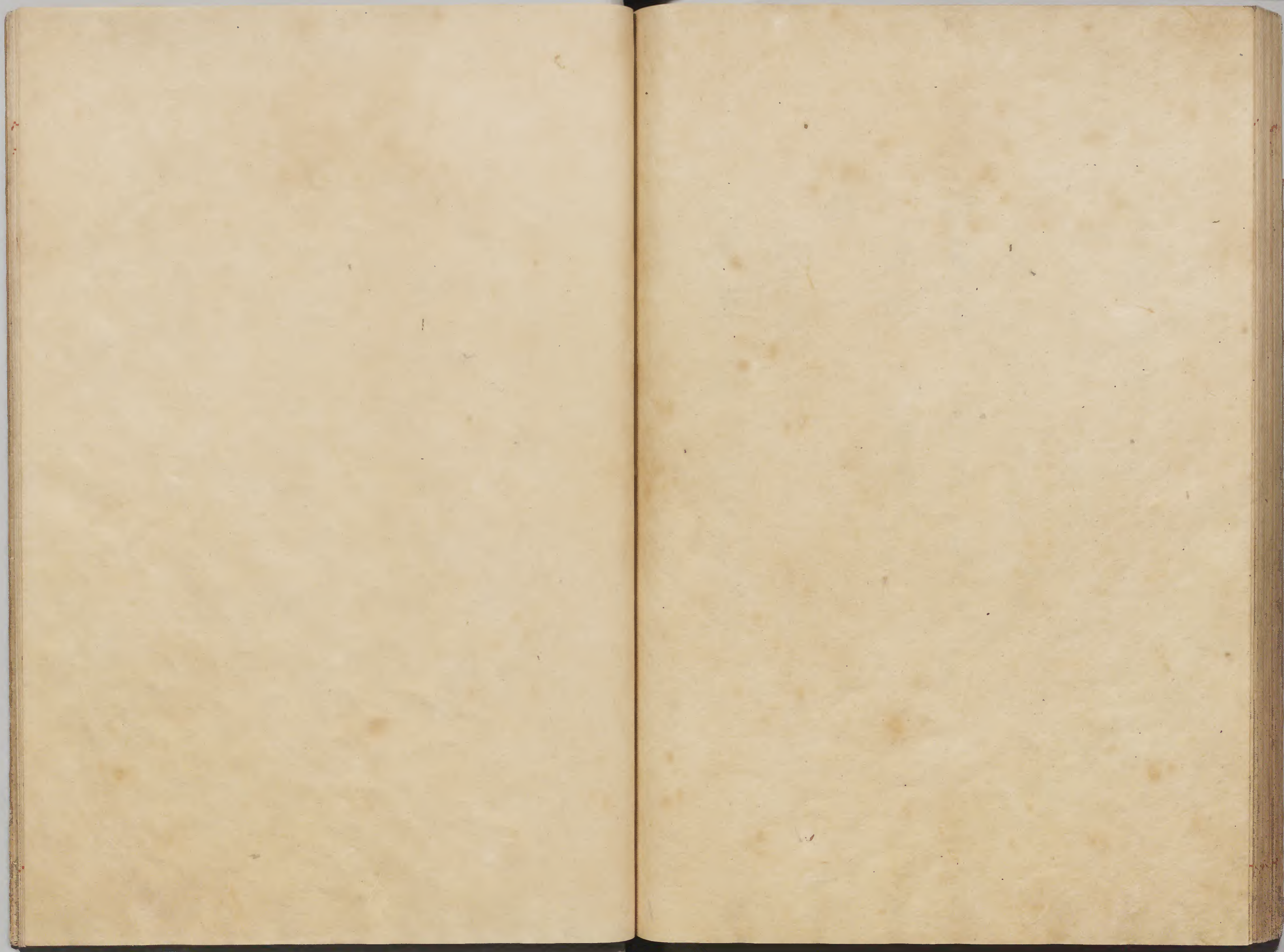
將軍家より湯へ

正俊

虎藏 七回武藏

將軍家より湯へ

家の紋櫛の葉



● 集

既川こがわ

織田おだのついでにあつたりしる子こ

平九郎 法名宗玄そうげん

秀ひで之の秀ひで

平九郎尉

牛田うしだ有あり

織田源正忠たけだげんせいしゅ一いっ尾州奥村おしゅうおくむら  
七しち十じゅう歳さい一いっくく死しと

一秀いっしゅう

孫まご之の郎らう 生なま國くに日ひ前まへ

織田信長たけだのぶなが一いっ信しん人にん志し志し軍ぐん切きりり

一いっ靈れい場じやう院いん義ぎ昭しょう志し本ほん流りゅう一いっ多た

一いっ多たりりるるるるるる一いっ番ばん一いっ河か

一いっ法ぽう得とくとと一いっくくとと

一いっ年ねん一いっ没ぼつ落らくとと一いっ盛せい法ぽう別べつ

一いっ年ねん一いっとと一いっ五ご十じゅう四し歳さい少せうく

死しと 法ぽう名な淨じやう哲てつ

一秀いっしゅう

七しち郎らう太たい左さ衛ゑ 生なま國くに日ひ前まへ

信しん長なが一いっ尾お州しゅう瑞ずい成じやう乃の城じやうと

一いっ信しんと

永えい祿りく三さん之の今いま川がわ上の上結むす外の外義ぎ元げん上の上流りゅう



一秀と中務の海ととき義之此  
無とち坊一秀技珠と  
しむく軍切ありと時加増  
尾州の海としむく三百歩の地と  
たまふ  
信長意本とせしころと一秀右威  
と抽と橋州伊丹の城とす  
入討死四十二歳 是名海志

秀利

と五郎 十個目か  
文禄四年  
大槍状ととく人

孝長二十十月らるる二十三歳  
是名海志

分勝

年七郎 生同日也

文祿四年

大杉現

孝長

同十八年

十月十七日

死

法名

分好

本屋射 生同日也

孝長十四年

名

大坂

之和二年

將軍家

勝守

年七郎 壬辰武苑

年長十八年

大権現

大攻支那陣

久初二年

台酒院

寛永二年五月廿七歳

は名

重昌

玄屋尉 壬辰武苑

久初二年

將軍家

守良

年七郎 生玉

寛永

右酒流殿より所々を尋ね

同九年より

將軍お前よりつるをよきまのち

秀盛

五右衛門尉 牛回尾張

くさくさい備田信隆よりよき秀盛

お別小田原の城とせしむるに信隆

秀盛と撰なりしと

秀盛より備田信隆よりよき秀盛

羽守守お輝政よりよき秀盛

川の城よりよき秀盛

よき秀盛城守より教陣

よき秀盛城守より教陣

法名浄孝

合巻

旭十郎 牛回武流

寛永十八年六月分廿一歳

しつとめく

將軍家一掃傷一とくまの

同十九年六月より御小姓の書

はとむ

家の後四一重菊後一南打家

中二義一没

